



For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

P・H・フェニックス著
佐野安仁・吉田謙二訳

『宗教教育の哲学——教育の神

礼拝——』

(晃洋書房・発行一九八七年四月
A5版・二〇四頁・二、三〇〇円)

興味深い本が出版されたものだ。と言っても全く新しいものではない。原著は一九六六年コロンビア大学で教育哲学を担当していたフェニックス教授によって出版されたもので一九七二年には佐野教授を含む三人の訳者によって日本語訳が出版されている。今回改訳の形で晃洋書房が本著を新たに提供してくれた事は本の内容に鑑み、嬉しい事であり、歓迎すべき事といえる。

佐野、吉田両教授は既にフェニックスの「意味の領域」(一九八〇)の翻訳にも係わっておられ、著者の意図するところを明確、明瞭に表現し、読者の思考を啓蒙する。

本著は「教育と神礼拝」を副題としているが、原著ではこれが本題である。実際の内容は教育における不可避、不可欠の要素としての宗教、それも究極的真理や意味という理解に基づく包括的宗教をフェニックスは主題としている。明確に宗教的多元性の道をたどっているアメリカ、特に一九六〇年代の状況を背景にフェニックスは、教育の作業全般を通して宗教的課題は、人間の存在と本性と行爲を深く理解するために必然的なものであると主張する。しかし同時に、今日の世界においては一定の状況の普遍性があり、それに伴って共通した洞察や方法が教育の論理や実際にあてはまるとする。この論理は当然教育を考える場合、特に日本におけるキリスト教主義教育を目的とする場において今一度深く考えてみるべきものであろう。

フェニックスは七章にわたる展開において言語、科学、芸術、倫理、歴史等の分野

に広く彼の教育論理と哲学を適応させ、総合的営みとしての教育における活氣的創造性を求め、標榜する。その根底には「生」の肯定、「生」の価値に関する確信があり、オプティミズムが見出される。そのオプティミズムはけっして空想的ユートピア主義ではなく、人間の存在そのものが危険に晒されている現代社会を厳しく認識した上での思想であり、その危険性が故に再考されねばならない宗教や教育の本質に関連したものと見えよう。著者フェニックスには一種の熱情が脈打っている。訳者達はその熱情もよく理解してその職業にあたったにだけに、この本は貴重な挑戦的資料となっているのである。

深田未来生(大学神学部教授)

土肥昭夫著

『日本プロテスタント・キリス

ト教史論』

(教文館・発行一九八七年六月
A5版・三七六頁・三、五〇〇円)

著者は、同志社大学神学部で教会史を講じておられ、『日本プロテスタント教会の成立と展開』(一九七五年)『日本プロテ

タント教会史」(一九八〇年)など日本のプロテスタント教会史の学究として広く知られている。学生時代から土肥さんは勉強家で、寮生活をしていたときも、右腕に黒いカバーをした。それは、いまはあまり用いられなくなったが、ソロバンや簿記をする人たちが、ワイシャツや洋服の袖口を守るためのカバーであった。事務所ではとさおりそういう人を見かけるが、大学の寮の自室で黒いカバーを右腕にして勉強する人はそういなかった。そのころ土肥さんは、古代の教会史や教理史に関心をもち、同志社から京大に赴いた有賀鉄太郎教授の指導をうけ、のちには、京大にもいつて研究をされていた。

土肥さんの主たる関心が、古代の教会史から、日本キリスト教史に変わったのは、彼のニューヨークのユニオン神学校の留学体験による。著者もそのことに触れている。外国に出て、ただでさえ日本のことが懐しく想われているときに、世界の各地から来た友人たちから「お前の国のキリスト教の特色は何か、どういふ存在理由があるんだ」などの問いをうけて日本キリスト教史

への目覚めを促されたという。(一一頁)そこから生れたのが同氏の処女作『内村鑑三』(一九六六年)であった。

本書には、著者がここ一〇数年の間に新聞や雑誌に書き誌した論文、評論、随想、あるいは講演の草稿などの中から、キリスト教史に関する随筆風のものを選び出して、一冊の書物にまとめたものである。それらはI日本キリスト教史の方法論、II民衆とキリスト教、III天皇制とキリスト教、IV日本基督教団史論、V戦後のキリスト教の五つの章におさめられている。

土肥さんは、これらの論考を「随筆風の論文」といつておられるが、着流しの談論風のものではなく、着実に史実をふまえ、手堅い手法で、近代日本の激動する社会の中で教会が避けることの出来ない社会的課題についての批判的検討を著書独自の論調で扱ったものが多い。

三つの感想をのべてみる。

第一は、著者は民衆史の視点から日本のキリスト教史をとらえることを提唱しているが、この民衆とは何かということさらに検討する必要がある。著者は「庶民あるい

は民衆」(六〇頁)という表現をしているが、韓国の「民衆の神学」における民衆は「抑圧された人びと」という意味あいをもち、単なる庶民とは少しちがうように思う。

第二は、本書の中には、前橋のハリスト教会の会員で製糸業に携りながら、日露戦争に批判的であった深沢利重や、広島県四日市に生れ慶応義塾に学び食品販売業をしながら、田中正造を支援し谷中村の人びとの問題に関心を寄せていた逸見斧吉のような人びとの生きざまを丹念に追っているところがあり、土肥さんの真情をみるおもしろい。

おわりに、わかしが感銘した文章を記して擷筆する。

「日本の民衆がその生活の座からうけ入れ理解したキリスト教が成立する可能性は存在する。日本の精神的風土に土着したキリスト教がうまれる可能性は十分あるという希望と確信をもって、この問題が解明されねばならないだろう。欧米よりの借り物の信仰、借り物のキリスト教理解の時代はすでに過ぎ去ろうとして

いるのである。」(六〇頁—六一頁)

著者は日本の土壌の中で、日本人としてうけとったキリスト教の人間観や価値観を抱いて苦悶しながら、新しいキリスト教理解が形成されることを確信して、大胆に歩むことを提唱している。

竹中正夫(天学神学部教授)

ジョン・マッコリー著

藤代泰三・鈴木津摩訳

『神の民の信仰』

(鳴滝書房・発行一九八七年一月)
(B6版・二一二頁、一、〇〇〇円)

著者はスコットランド出身の著名な神学者である。グラスゴー大学、ニューヨークのユニオン神学校で教え、一九七〇年オクスフォード大学教授となり、クライスト・チャーチの説教者ともなった。著書多く、英国では実存論神学を代表している。

神学とは何か。ここから始めて、著者はキリスト教教理全般について論述している。内容は十二項目で、各項目ともほぼ十五頁である。内容からしてこんなに圧縮することはむずかしいのだが、圧縮し、しかも、それぞれの「さわり」のところを取入

れ、自分の立場をきちっと、時に大胆率直に表明している。いくら「信徒の神学」といっても、ドグマチックなのだが。それがいい。加えて、読み易いし、新鮮である。信徒向けとなると、専門的なものを稀薄化したり、安易に書き直したりするものだが、そうした意味で読み易いのではない。これは著者の立場からおのずと結果したことである。

著者によると、キリスト教は一つの生き方全体である。生き方は人間、世界についての信念を含む。これらの信念、あるいは教理を明確に示そうと努めるのが、神学である。とすれば、神学それ自体は生き方の一部であり、専門家だけに限られた領分ではない。信徒の神学は、専門家による神学を修正し、その基礎をひろげ、神の民全体の生をよりよく代表する神学を生み出すものである。神の民の生を基礎として語っているから、その生と現実にかかわらせていることで、読み易いし、新鮮である。例えば、「神の民の環境」(自然の世界と歴史)の中で、環境問題、自然開発、創造と摂理が論ぜられている。

各項目は以下の通りである。「神学とは何か」、「出発点—啓示(聖書)と神の民(教会)」、「旧約聖書とは何か」、「神論」、「人間論」、「自然の世界と歴史」、「キリスト論」、「聖霊論」、「礼典論」、「奉仕と伝道」、「祈禱論」、「終末論」である。これらは括弧内の項目名で、本題はどれも「神の民」云々となっている。「神の民」と自ら主張する共同体の存在の事実、この印象的で劇的な事実が神学の基礎的資料である。この共同体の発端は、人々がキリストより全体的衝撃を与えられ、彼に身をゆだねるに至らせた創造的出来事であったと、著者は述べる。また、聖書は無謬だという考えの誤りは、直ちに認められる。それは神の民を生み出したものを言い表わそうと、誤り易い成員たちが力の限り努力して書いたものであるなど、これも一例だが言いにくいこと、本音ではわかれわれもそう考えるようなことを著者ははつきり表明している。信徒にもそうだが、「専門家」にも必読だろう。

こんな書を選び、訳された藤代、鈴木両先生の労に敬意を表したい。訳者による末

尾の「梗概」も読者に親切である。訳が多
少硬いという印象を受ける。

緒方純雄（大学神学部教授）

エルンスト・ライズィ著

大泉昭夫・野入逸彦訳

『現代の英語——その特徴と諸
問題』

（山口書店・発行一九八七年三月
A5版・三八二頁、四、八〇〇円）

英語伝統文法学者の最高峰、オットー・
イエスペルセンの名をあげるまでもなく、
英語を母国語としない英文法学者の著作に
は優れたものが少くない。これは彼らが英
米人学者が案外見逃しがちな言語事実を、
客観的に敏感に察知して記述できる立場に
あるからだろう。イエスペルセン（デンマ
ーク）、ポウツマ（オランダ）、クロイシン
ガ（オランダ）、ドイチバイン（ドイツ）、
ライト（ドイツ）らの名がすぐ思い浮かぶ
が、いずれも故人で、現役で活躍中の第一
人者といえば、本書の著者エルンスト・ラ
イズィの名があがってくるだろう。

ライズィ教授はスイス人であるが、ドイ
ツ語を母国語とし、英語を見つめる眼は常

にドイツ語と英語の比較という観点を重視
している。本書は一九五五年に刊行以来、
五版を重ね、ドイツ語文化圏で英語学を専
攻する者の必読書といわれるだけあって、
現代英語の生きた姿を余すところなく記述
している。

本書は「音声と文字」、「混合的語彙」、
「語形と語義」、「文法構造」、「英語の階層」、
「国際語としての英語」の六章から成って
いるが、全章を通じての著者の観点は一党
一派の理論に偏することなく、公平で穩当
なものといえる。構造主義の考え方も良き
点は十分にとり入れ、生成理論もこれを全
面的に排する立場はとっていない。例え
ば、「音声と文字」の章に関していえば、
とかく音声を扱った部分は文法書の中でも
もっとも退屈で、読書を引きつける力に欠
けることが多いが、ライズィはいたずらに
音声の科学的面的みを強調することなく、
楽譜や豊富な実例を用いて、英語の音組織
の全貌を要領よく解説している。また、「
英語の階層」、「国際語としての英語」は
従来の類書ではあまりとりあげられていな
い項目であるが、著者の広い視野に立った

穩健な意見は読者を十分に納得させる。私
は英文法理論を専門にしている者なので、
文法を論じた第四章に特に注目したが、動
詞の機能について、特に、アスペクト論に
得るところが多かった。

各節の後につけられた参考文献表は実に
懇切で学習者への良き指標となる。大泉、
野入両教授の訳文は正確でかつ読みやす
く、学生諸君はもとより、英語研究者、中
・高等学校の英語教員の皆さん、「英文法
をもう一度やり直したい」と思っておられ
る方々に広く薦めたい良書である。

石黒昭博（大学文学部教授）

石黒昭博・中井 悟・龍城正明・吉藤京子
共著

『現代英語学要説』

（南雲堂・発行一九八七年六月
四六版・三五八頁、三、五〇〇円）

これは三百五十ページという堂々たる書
物である。英語学といえは一般の人たちに
は小さな特殊な専門分野だと思われがちで
ある。そんな特殊分野でこんな分厚い書物
が書けるなんて一体、中には何が書いてあ
るのだろうか。英語学という名称から推し

て、英語について論じる学問だろうというくらいは誰にも想像がつく。だが英語について何を論じるのであろうか。そこで目次を眺めてみると、第一章「英語とはどんな言語か」に始まって第十五章「日英語対照研究」に至るまで、さまざまな話題が並んでいる。

英語学を最も狭い意味に解釈すると、それは現行の英語の(一)音声の仕組み、(二)文法の仕組み、(三)語彙の特徴、そしてこれらを通じて表出される(四)意味の構造、の四部門を取り扱う専門領域だということになる。英語を通して意味が伝わる時、英語の音声、文法、語彙が駆使される、その仕組みや過程を分析するのである。この書物でいうなら、第七章「音声学」から第十一章「意味論」までの五章がこの最も狭い意味の英語学を扱っていることになる。どんなに広い見地から英語学を捕らえる場合でも、この最も狭義の英語学が根幹にならないということは考えられない。「まえがき」にもことわってある通り、「共時(つまり現行の英語の)記述的な(つまり客観的な観察、考察による)ものをそ

の核心にすえて編む」というのは正にそのことを指して言ったものである。この中心部分が本書の約三分の一を占めている。この部門は、概論を一応修めた人がさらに英語学の基礎を固めるとき、個別に各論の形で系統立てて学ぶことが必須とされている分野である。

この基礎部分では、英語をいわばその内面において捕らえるのであるが、それでももし英語以外の言語がどんな形をしているのかをまったく知らなかったら、英語そのものの特質を見定めることは難しい。一般に人類の言語とはそもそもどんな仕掛けになっているのか、それを客観的に認識してこそ、英語の英語らしさが分かるということである。だから英語学が「総合科学としての言語学から、結果のみならず方法論の多くを学ぶ」ことになったのはしごく当然なことである。「総合科学としての言語学」という言い方にも深い意味がある。言語は、人間の発声機能をはじめ脳や神経や心理や進化、成長といったあらゆる人間存在の側面とかかわりを持ち、文明活動のすべてを支えている。したがって英語学を広い

意味に解釈すれば、英語を母国語として使う方言集団や諸民族をはじめ、英語を第二言語として、あるいは外国語として使うあらゆる民族のことを考えに入れなければならない。また過去にさかのぼって、言語としての英語の成立、発達、変遷、その世界的、歴史的な位置づけ、なども考察しなければならぬ。だから本書のように、狭義の英語学だけでなく、それと不可分の諸領域をも通観しようとするれば、当然「何をどれだけ」取り込むか「その枠組みを定めるのも易しいことではない」。目次の十五章を設定したことによって、本書は本書なりにこの点について一つの回答を出したことになる。そこには英語史(第四、五章)、世界の中の英語(第一、二、十二章)、文の英語(第十三、十四章)、日英語対照(第十五章)、英語学の研究領域(第三章)の各話題が紹介されている。いずれも実は大きなテーマであるから、一通り見渡すとみると、いきおいあるものは項目の列挙のようにならざるを得ない。講義や章別の参考文献によって、読書各自が内容を満たしていくことが期待されている。

「まえがき」にも見える通り、本書の想定読書はまず第一に大学、短期大学の英文学科または英語学科で「必修科目として」「英語学を履修する人たちである。もし今日の英文学科、英語学科が、英文学や英語学の専門家を養成するというよりもむしろ英語を駆使する能力の養成を期待されているとするなら、「英語学」という必修科目に期待されているのは何であろうか。察するに、他の科目と相まって、第一に英語学という学問がどんなことを研究する分野なのかわかるようにすること、第二に英語という言語が以前より立派に適切に使えるようになるための方向づけをすることが学科目としての「英語学」に期待された役割ではないだろうか。

本書の読書がこの二点についてどのくらい明確に各自の認識を得ていくかによって本書の評価が定まることになる。ともあれ本書の出現によって、「英語学」履修者がますます英語に堪能になり、各自の興味と関心を見出し、列挙された数ある英語文献を自力で読破できるよう、英語の力を培われんことを願ってやまない。

岩山太次郎編 岡田 妙 (大学経済学部教授)

『アメリカ文学を学ぶ人のために』

(世界思想社・発行一九八七年二月)
B5版・三三三頁 一、九〇〇円)

この数年の間にアメリカ文学史とかアメリカ文学入門書が相次いで出版された。この事は本国のアメリカにおいても同様である。これはとりも直さずアメリカ文学史、あるいはアメリカ文学研究についての従来のある方が大幅に見直されつつあることの結果である。

本書はその題名から判断できるようにアメリカ文学への入門書であるが、その根底には右に述べたような現時点における学界での趨勢を敏感に受けとめ、特にわが国におけるアメリカ文学研究のあり方にたいして、いわば軌道修正を問いかけてようとしていくことは明らかである。そしてその姿勢の顕著な特質は編者の岩山氏が「まえがき」で述べているように、アメリカ文学をアメリカという国の地域的・人種的多様性及び「アメリカを支えてきた基本的な精

神」の理解に重点を置いていることである。

この目的のために本書は大項目として「アメリカを支える精神」「ロマンティズム・リアリズム・ナチュラリズム」「両大戦間の社会変化と小説」「南部社会の風土と文学」「詩の伝統とモダニズム」「演劇の活力」「短篇小説の魅力」「批評の原理と歴史」「今日の新しい文学」「日本の若い作家たちと現代アメリカの文学」を設定し、いくつかの大項目の中にまた小項目を設けて、それぞれについて十六名の専門家が執筆している。加えて、これら執筆者の全員が関西圏で活躍している研究者であるのも壮観である。

本書の巻頭に、いわば序説にあたるものとして、執筆者たちのうち五名による「アメリカ文学へのいざない」と題する座談会記録が掲載されているが、それがこの座談会の内容が本書の特長を示している。そのひとつは本書の対象はアメリカ文学を学ぶ学生であるということ、いまひとつは、司会者岩山氏の努力にも拘らず、発言者たちの足なみが必ずしも揃っていないという

ことである。学生が主たる対象であることを大前提として、各執筆者の「独立した論文」（「まえがき」）を読む時に、初学者に

対する配慮に欠けるものが見受けられるのは残念である。たとえば川上忠雄氏の「ヤンキーイズム、フロンティア・スピリット、プラグマティズム」の中にクーパーを論じて、「文明の担い手テンプル判事」（69頁）という句が突然あらわれるが、少くともテンプル判事が「開拓者たち」の登場人物であることを示すのが親切というものではないだろうか。その点では佐々木隆氏の「成功の夢と挫折」、村上陽介氏の「南部社会の風土と文学」、石田章氏の「演劇の活力」などは行き届いて親切である。

また馬場美奈子氏の「少数民族の抬頭とその文学的特質」は新機軸を出すものとして注目すべき論であるがアジア系のハン・スウィン（中国系）、キム・ロンヤン（韓国系）、トシオ・モリ、ヨシコ・ウチダ、モニカ・ソネ（日系）というような作家を当然取り上げるべきではなかっただろうか。

こういう問題点にも拘らず編者岩山氏の卓見と視野に支えられた本書は、わが国の

アメリカ文学研究と教育に新しい方向を打ち出すものとして注目に価いする。

坂本完春編
原田敬一（千葉大学文学部教授）

『英文学を学ぶ人のために』

（世界思想社・発行一九八七年四月）
（B5版・三三二頁 一、九〇〇円）

唐突な書き出しだけれども、大体、文学史などというものは襍ぬえのようなもので、心配性の人にかかる、仔細にこだわって締めきりがないのに込み入った作り物に仕上げてしまうから読む方が迷惑するし、だからといって、概略を大雑把に捉えて示されたんでは、往々、その奥ゆきの深さが知れないから、読む人は迂闊な値踏みをしたまま平気で納得してしまう。このあたり、どう折り合いをつけるかは、はなはだ面倒である。

坂本完春教授が編まれた『英文学を学ぶ人のために』では、そのあたりの兼ね合いが、周到な構想に基いて大胆に処理されている。構想というよりは、むしろ一つの見識というべきかも知れない。

一応の体裁を紹介しておく、本書の冒

頭には先ず座談が置かれ、英国の風土や国民性といった広範な視座から英文学全体が鳥瞰される。そうして、以下、英文学の流れが7部に大きく分けられ、22編の論文によって詳述されるのだが、名を連ねる執筆陣が、それぞれ、その道の蘊奥を究めた研究者であることが嬉しい。また、日本における英文学の受容といった側面も見逃されていないし、懇切な文献案内や、索引の充実も何よりありがたい編者の配慮である。

さて、このような体裁の類書が他にあるようで、実はあるまいということの特筆しておきたいのである。本書の一つの見識を感じるゆえんだからだ。というのは、計23篇の論文、それぞれ書きぶりは異なるとはいえ、単に限られた時代の文学の概要を伝えているのではない。むしろ、一歩突き進んだ論考に近い。例えば、「英国の」十七世紀の新古典主義は、当初から自由と破格を前提としていた」と説き起すような類書が他にあるだろうか。当然そこに、類書では期待しにくい執筆者それぞれの勘考の跡が窮えるはずだ。そのことが一つ。

また、本書では、例えば英国のルネサン

ス期の文学が、ソネット、パストラル、そしてシェイクスピアを中心とした劇作家群像という三つの項目で論述されるが、ソネットにしろ、パストラルにしろ、本書のように仔細に論じた類書を他に見ない。時代別文学者列伝といった安易な観点が棄てられ、文学のジャンルに注目することで、平板な文学史の流れに時代の枠を超えた奥ゆきが与えられているということだろう。そのことが二つ。

そして、三つ目、仮りにV・ウルフを取りあげてみよう。本書では女流文学者の系譜につながるウルフと、今世紀の小説手法の開拓者としてのウルフという風に、二つの視点で別個に論じられている。このように、本書には一個の作品なり文人を複数の視点の中で捉える工夫があり、おかげで多面的な英文学像が浮かび上るといっても、もとより編者の期したところだと思ふ。

以上のことを考えても、本書を単なる入門書と見るのは間違いだらう。徒らに繁雑な文学史書や野放図な輪郭の中に作家列伝を埋め込んだだけの概説書に対して、一つの見識を示したものだと思う。英文学徒に

は必携の書である。

山田正章（女子大学助教授）

小林章夫著

『ロンドン・フェア——一八世

紀英国風俗事情』

（駁々堂・発行一九八六年十月
B5版・二八七頁 一、八〇〇円）

いつの時代にも、「都市」というものがある。華やかさと、活気と、喧騒、そして悪徳と、退廃。そういった大都市ロンドンの光と闇の部分、まるごとひっくり返して語りあかしてくれるのが、小林氏の『ロンドン・フェア』である。

『ロンドン・フェア』は、著者の、『コーヒー・ハウス』（駁々堂・一九八四年）、『クラブ』（駁々堂・一九八五年）につぐ一八世紀イギリス文化についての三冊目の著作である。

標題が示すように、著者は一八世紀ロンドンを、当時ロンドン市中のスミスフィールド等で定期的に開かれていたフェア（市）にみたてる。マーケットに見せ物小屋、旅芸人に興業師、奇跡劇に公開処刑、決闘あり喧嘩ありの、あらゆる階層の人々があふ

れんばかりのエネルギーで繰り広げる、雑多で狼狽な一大イベントのフェアを、著者は、「一八世紀ロンドンの縮図」と言う。

プロローグで示されるように、当時のロンドンには、建築ラッシュと人口の膨張により、異常なまでに無秩序にふくれあがっていた。それゆえ自由で、華やかで、活気に満ちた表の姿の背後には、貧困と犯罪に満ちた裏の姿が隠されていたのである。

第一幕では、フェアを通して、主に当時の庶民が、日々の暮らしの合間をぬっていかに人生を享受したか。あるいは遊園で繰り広げられる園遊会や音楽会、仮面舞踊会を通して、上流の人々がいかに華麗に優雅に人生を楽しんだかが示される。

これがロンドン生活の光の部分だとすると、第二幕、三幕では闇の部分が見られる。繁栄の裏で増大する貧困。その落し子ともいえる捨て子育院。あるいはニューゲイト監獄を出たり入ったりしながら、巧妙な悪の手口で盗みを重ね、闇の世界を暗躍する暗黒街のボスたち。そして群集暴動。これらは当時のロンドンの丕にひしゃげた部分を象徴的に示しているといえるだ

る。

このように本書は、小林氏自身の言葉を借りれば、「都市ロンドンの明と暗」そして「アンビヴァレンス」をまるごとすくいあげることによって、いわば一八世紀ロンドンのエッセンスを伝えることに成功している。要をえた文献の引用、豊富な図版に加えて、猥雑な世界、悪徳の世界を描く際の、言葉があふれ、ペンが踊っているような著者の筆力も、当時のロンドンの息吹きを、生き生きと伝えるのに役立っているのは言うまでもない。

玉田佳子（女子大学研究助手）

伊藤彌彦編

『日本近代教育史再考』（近代史

叢書一）』

（昭和堂・発行一九八六年十二月）
（A5版・二六二頁、二、六〇〇円）

近年、政治史や社会史などの領域において教育史に対する関心が高まり、多くの成果が公刊されつつある。公教育に限らず、教育事象全般は、他の種々なる社会事象と相互に連環関係を有して生起する以上、他の専門領域において関心を集めることは当

然のことであろう。とりわけ、教育の内実と方向を決定する上で、政治が大きく関与した日本の近代教育の諸問題を考察しようとするならば、政治史的観点を導入することは不可欠となろう。

伊藤彌彦編『日本近代教育史再考』は、政治史的観点に立脚し、日本の近代教育の諸特性の解明をめざしたものである。編者によれば、従来の教育史研究の欠陥は、文部省の教育政策史に沿った叙述形式や、実践の意味を強調するあまりに「学問的客観性」から離脱しがちな「教育実践史」に偏重するところにあった。如上の観点から、日本の近代教育史の「再考」を試みようとするのが本書の意図である。この問題意識は編者が担当した「学制」再考」に集約的に展開されている。「学制」は一八七二（明治五）年に、明治政府が文明開化政策の主要な柱の一つとして発布したものである。明治政府の業績を称えたり、日本の近代化を高く評価する際には必ずといってよいほど「学制」の開明性が前面に出されてきた。これに対して、「学制」を明治政府の絶対主義的政策の一環として位置づけよ

うとする「教育実践史」的立場等がある。伊藤氏は、「学制」の成立過程を整理し、その制定の意図や構想、それに「被仰出書」にみられる「学制」の教育理念に新解釈を加えている。

この他に、本書は教学聖旨が教育勅語に先行したものと位置つけた高橋真司氏の『教学聖旨』再考』や、明治政府の教育政策に対して、独自の教育構想を打ち出そうとした自由民権派の教育思想を発掘した出原雄雄氏の「自由民権思想における国家・教育・人権」、帝国議会における教育論議の分析を通して、明治教育が帝国議会における合意という法律主義によって形成されたことを論じた尾崎ムゲン氏の「教育政策の形成と帝国議会」、日露戦争後の社会変動にともなう教育政策の転換や教化政策の展開を論じた岡田典夫氏の「日露戦後の教化政策と民間」、大正から昭和にかけての宗教教育と国民道德の関連を論じた鈴木美南子氏の「天皇制下の国民教育と宗教」など、近代教育史の「再考」を迫るに十分な力作からなっている。

沖田行司（大学文学部助教）

森 浩一著

『新日本史への旅』

東日本編

(朝日新聞社・発行一九八七年三月
A5版・一六八頁 一、八〇〇円)

西日本編

(朝日新聞社・発行一九八七年三月
A5版・一八〇頁 一、八〇〇円)

人類学・考古学の先達、故鳥居龍藏博士は旅を愛した学者として知られている。植物業の南方熊楠や歌人の若山牧水も、こよなく旅を愛している。学者として、歌人としての彼らは旅に何を求めたのであろうか。

「新日本史への旅」の著者森浩一教授も、旅好きの学者の一人である。ちなみに著者の旅を日本国内についてみると、各都道府県のそれぞれに、最低二十ヶ所を目標として宿泊するのを、ここ数年來心がけておられ、しかも十ヶ年以内に期間を限っているところがすごい。もとより著者の旅の目的は、考古学に関する調査をはじめ、古代史、民俗学の取材旅行、国際シンポジウム、講演などときまぎらまであって、ときに

は山里のひなびた温泉で、地酒をじっくりと味わいつつ、地元の研究者と談笑しながらの取材が夜ふけまで続く。旅に出ても朝は早い。夏でも冬でも朝食前に散歩がてら宿舎周辺の観察と取材がついてまわる。あくことのない知的好奇心の「カタマリ」といえる。

知的好奇心の「カタマリ」に加えて、歴史を観る目の正確さ、地域史への関心の公平さと、豊富な知見の蓄積が本書の随所から読み取れる。とりわけ、「ヤマト中心の歴史を打破する」視点や、「それぞれの地域から歴史を問ひ直す」視座での歴史観は、読者に「さわやかな読後感」を与えるに違いない。奈良や京都に多くの紙数をついやすことなく、北海道や沖縄を含めて都道府県のすべてを一項づつ平等に扱っているところが嬉しい。つまり、著者も指摘しているように、日本人の思考の前提に、日本は古くからの統一国家があり、一つの文化、それも、中央から地方へ、という伝播の法則があるとかたくなに信じている人達が意外と多いだけに、そのような考えをもつ人達にこそ、地域史の意義を理解してい

ただくために、一読をすすめたたいのが本書である。かならずや、目前に展開する地域文化の重要性に気付くことになろう。

また、著者は、日本列島を歴史の舞台とした各地の先人達の歩みを、古代から近代を含めて東アジアの視野で評価されており、どの項目も東アジアの中の日本、日本の中の地域の歩みとして特徴的に捉え、しかも具体的に示す資料は、示唆的でさえある。日本各地の遺跡・遺物、絵画、彫刻、古記録など多くの資料を扱いつつ、歴史的评价を含めて、平易に述べられている。

ちなみに、東日本編、西日本編のそれぞれから任意にいくつかの項目をとりあげてみても、外人の羅漢像(岩手)、ヒスイの原産地(新潟)、ガラスの文房具(奈良)、海人族の僧(愛媛)、反体制の石人像(福岡)、漂着した唐船(大分)などすべてが、東アジアの中の日本、日本の中の各地の歩みの一コマとして、具体的である。全体を通じて、日本各地の遺跡・遺物、絵画、彫刻、古記録などときまぎらな資料を提示しつつ興味深く述べられており、鮮明なカラー写真が豊富に使われていることも、

視覚からの歴史を楽しませてくれる。

強烈な印象を残してくれるカラー写真は、すべて元朝日新聞写真部長の吉江雅祥氏の撮影になるものであり、本書を手にして日本史の旅に出る読者にとって、各項目の末尾にある「ガイド」や「あし」などとともに、案内役としての大きな力を發揮している。

なお、外国人留学生を対象とした「日本事情」の歴史的分野の授業で、参考書の一つに本書を使用したのが、新鮮な歴史観と地域の実体を知る上での手助けとして、東アジアからの留学生にとって、とりわけ本書が好評であったことを記して置く。

日本列島を対象とした、新しい歴史観での地域の評価が、いま見なおされている。それだけに、「新日本史への旅」の著者、森浩一教授のたゆまざる旅の一里塚として本書を座右に置き、続刊を期待したいと思う。鈴木重治（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

森 浩一対談集

『古代技術の復権―技術から見た古代人の生活と知恵―』

（小学館・発行一九八七年二月）
（B5版・三一七頁 一、九五〇円）

新聞を見ると各地で埋蔵文化財の発掘調査が行なわれ、出土した遺構・遺物について大きくあつかわれ、それらの記事を見るかぎり、我國の古代史研究は「日進月歩」の進展があるように思われる。ところが、実際は発掘調査の大部分は破壊を前提とした「事前調査」であり、その資料を基礎にした研究・活用にたいしてはわずかな予算しか与えられていないのが現状である。そして、文化財に携わる人達のなかにも半ばあきらめのようなものも感じられる。ところが、文化にとって最悪の季節ともいえる、昭和十八年、鳥根県安来市に民間企業の手によって博物館が作られている。それが日立金属和鋼記念館である。日本海地方特有の資源を生かす技術の伝統を保存しそれを活用していくこの企業姿勢が、現在世界的な水準を誇る製品を送り出している原動力になっているのである。

この本は狭いジャンルにこだわらず、古代史研究に新しい研究方法を確立した森浩一氏の対談集である。現代の研究者たちが無意識のうちに「常識」と思い込んでいた事柄をいろいろな分野の研究者との対談のなかで、一つ一つ解きほぐしている。森氏の独特な話術に引き込まれるように古代史研究に携わるものには、意外なそして興味深い事実が明らかにされている。しかし、この本は単なる研究概説書ではなく、冒頭にあげた和鋼記念館のような「現代」を考へさせる話がちりばめられている。例えば、古代織物の研究者、布目順郎氏の祖父は科学好きの中学生の孫に高性能の顕微鏡を買い与えた。その結果、孫は顕微鏡の世界に取りつかれ世界的な権威となられた。本物の魅力を教えられた祖父が研究者を育てたこの話などはその好例である。

どの分野でもそうであろうが、ともしれば研究者はその専門領域に閉じこもり、他の分野の優れた研究成果の存在に気が付かないことも多い。

ジャンクを使い中国江南から唐津までわずか三十時間でくることを知れば、古代に

おける交流のイメージも変わってこよう。神奈川の縄文章創期の遺跡から出土した木炭が実は奈良と高知の山奥にしか自生していない木のものであったことを知れば縄文人の植物利用を再考しなければならぬだろう。

固くなった思考回路をときほぐし、古代人の生活を考えさせてくれる好著である。

石川直章(同志社大学大学院文学研究科博士課程)

京都新聞社編 杉田博明著

『近代京都を生きた人々——明

治人物誌』

(京都書院・発行一九八七年四月
B6版・四九九頁 二、二〇〇円)

京都はいつだったいなるのか。いや、どうなるうとしていいのか。京都再生をめぐる論議も、市民の間から、沸騰してきている。(中略)活性化のための提案がなされたり、伝統と文化を踏まえた新しい京都策が打ち出されたりもしている。それらは京都の逼塞した状況に危機感をもって、なんとか抜け出そうとする手立を模索する動きであるにちがいない。

—まえがき

建都一二〇〇年を前にして、現在を明治維新以来の転機ととらえる著者の京都観がのべられている。それは、現在の京都の原型が、明治期に官民一致の〈近代化〉で築かれたという事実とともに、あらためて興味深いものがある。

本書は平安建都一二〇〇年特集として、京都新聞に掲載された著者の労作が、一本にまとめられたものである。明治期の京都は、わが国で最も進んだ近代都市であった。遷都によって危機を迎えた京都の再生には、有名無名の多くの先駆者が参画している。著者は政治・経済的側面からではなく、近代化に尽くした人物の生きざまにスポットを当て、そこから明治の京都が育んだダイナミズムを照射しようとする。それぞれの人物についての叙述は、人間ドラマとして構成されているため読物としても楽しめる。京都明治史の格好な入門書でもある。

本書は、それぞれの登場人物を、三部構成で浮彫りにしようとする。著者の筆になるストーリータッチの評伝、年譜、さらには各人物に縁深い識者の寄稿エッセイが加

わる。なかでも緻密な取材による年譜は、これだけでも貴重な文献資料となるだろう。「近代京都を創った人々」として、本書に登場する人物は二七人である。いづれも産業振興、芸術・文化、教育に新風をもたらした先覚者たちである。一部の研究家とはともかく、一般には本書によって初めて眼にふれる人物もあるだろう。個々の人物は、何らかの形で横に繋がり、最終的に楨村正直と山本覚馬にたどり着く。本書のユニークさは、縦横の人間関係の網の目から、明治の京都がしかと見えてくることだろう。

とくに印象的だと思われるのは、純粹な意味での政治家が、一人も登場しないことである。維新の京都は、政治の舞台を東京に奪われ、根強い反中央意識を育み、自ずと文化的な主導権を握ろうという途を選んだ。その意味で、産業・文化面に眼を注いだ登場人物の選びかたに、著者の京都人魂を見る思いがした。

福本武久(作家)

三輪茂雄著

『粉の文化史——石臼からハイ

テクノロジーまで——』

(新潮社・発行一九八七年五月)
B六版・二〇〇頁 七五〇円)

三輪さんはいうまでもなく工学部の教授である。「粉の文化史」の紹介を書こうとしている私は文学部文化学科の文化史学専攻の所属である。その一事からも推察できるように、三輪さんの研究、あるいは研究にさいしての関心が最近とみに学際的になってきたのを感じる。喜ばしいことだ。

三輪さんが石臼研究に取組んでおられるのを知ったのは、私が中京区の姥柳町にある南蛮寺跡を発掘していたところである。南蛮寺跡では石組みの炉に一つ石臼が転用されていて、これはのち年代の基準資料とわかったが、そのころは私をも含め考古学界ではまださほど石臼への注意がはらわれていなかった。だから考古学界が石臼の知識を深めるためには、三輪さんが次々に執筆された石臼についての著書がずい分役立った。

このように三輪さんはまず石臼を主にし

た粉と道具の技術史の開拓的かつ実践的な研究にじゅう分の時間をかけたうえで、今回石臼だけでなく、粉からみた人間の歴史に取組まれたのである。おそらく粉という視点で書かれた最初の文化史であろう。

私なども若い時には感じなかったが、齒が悪くなってくると、豆腐やうどんとは緑が深くなり、粉食の有難さがわかりだしたのだが、ふと考えると、人間と動物との違いは、栽培だとか食物を貯蔵することなどにだけ求められるのではなく、穀物でも木の実でも粉にしてそれを食べることにもあるようである。

人間がもし粉にする知恵と技術をもちあわせなかったなら、人間は飢饉などでずっと昔に滅んでいたかも知れないし、人間の寿命もこれほどまでに延びなかったであろう。

日本考古学では、縄文時代には粉にする道具が山地の遺跡ではたいへん多いのに、稲を栽培する弥生時代には激減し、室町時代ごろから再び増加する。これなどは考古学的にもさらに原因をつきとめなければならない。そういう課題もあるけれども、

歴史といえはいつい戦争中心の叙述であったり、あるいは政権争奪中心の編述であったりするが、誰でもが身近に知っている粉やその道具をとおし、人間の歩みを整理することは、今日の工業の水準を理解するのにも役立つであろう。本書はそういう意味で、科学と歴史とにまたがる好個の読物であるとともに、随所に読者とともに考えようとする著書のアイデアというか人間らしさのにじんだ好著である。

森 浩一 (大学文学部教授)

笠井昌昭著

『日本文化史——彫刻の世界か

ら絵画の世界へ——』

(ベリかん社・発行一九八七年四月)
四六版・二九二頁 二、八〇〇円)

本書は、著者が昨年四月から今年三月まで、米国で研究された間に、積年の論考の一部を明確な文化史的意識のもとに一書にまとめられたものである。

日本の歴史を通観しようとするとき、わたしたちは、ややもすればその推移の諸相に目を奪われ、歴史的諸事実に通底する動態的な史的作因を看過しがちである。そこ

で、この点に照準を合わせ、文明の精神的根柢を究明しようとする意識が「文化史学」を成立させることになる。本書の各章は、著者によって、ほんらい、やがて一冊の書物に展開されるべき論題の序章として位置づけられているにしても、それだけにかえって、日本文化の位相の動態的作因を把握しようとする意識と方法をいっそう鮮明に示している。

章立ては、序章 世界の中の日本、第一章 白鳳と天平の時代、第二章 最澄・空海の思想と鎮護国家思想、第三章 絵巻物にあらわれた歴史意識の展開、第四章 水墨画の受容と展開、第五章 金碧障壁画から文人画へ、付章 文化史学への視点——素描的に——から成っていて、日本人の世界観と歴史意識の描像が、佛教受容の事情や彫刻と絵画に関わる事象の精緻な分析を通して如実に簡明され、古代から江戸時代末までの日本文化史は、たとえば、禅機画に見られるようなさまざまな不徹底性を伴いながらも、具体的、有機的な物の理解から抽象的、無機的な世界把握へ進展する文明の精神史として剔抉されている。

著者によれば、彫刻の世界から絵画的境界への遷移は、日本人の精神史を截る内的根柢の視覚的表現であるが、それは、たんに中国的な彫刻が日本的な絵画に結実した軌跡ではなくて、明瞭性・深奥性・静止的であることを属性とする諸領域へ拡大され、平面的で不明瞭であるが動的であることを属性とする諸領域へ拡散する日本文化の徴表が顕現する態様である。その論証は明晰であり、例証の透徹した解析は、日本文化史学の画期的業績であるばかりでなく、評者のような門外漢をも一気に通読させずにはおかない魅力にあふれている。

しかし、その魅力のためによけい一つの素朴な疑問が湧く。それというのは、本書では歴史研究の方向を過去に限定しておられるけれども、真の科学的探究は、たとえその対象が過去に属しても、未来的な解明であり、著者の論考は過去の事跡に関する発見的未來そのものなのであるから、科学的見地からして、この限定は妥当と思えない、ということである。というのも、本書はその本質において科学性を証しする書物であるからである。

吉田謙二（大学文学部教授）

重久篤太郎著作集

『明治文化と西洋人』

（思文閣出版・発行一九八七年四月）
A5版・三七七頁 九、八〇〇円

重久先生の同志社大学英文学科ご卒業は昭和四年。故上野直感元総長と同期だ。「彼は学生時代からああいうことをやっていたなア」と、上野先生があるとき言われた。「ああいうこと」というのは、英学とか御雇外国人などに関する資料を、丹念に渉猟するお仕事のことである。

「重久先生が書いておられるのですから、間違いないでしょう」と、なにかのとき申し上げたら、上野先生がそう言われたのであったとおもっ。

重久先生は信頼しうる資料なしには、ものを書かれない方であった、と私は信じている。そのお仕事ぶりの一面は、同志社大学図書館（先生は私の図書館学の恩師である）や、社史資料室などで直接拝見した。時間と労力を惜しむことなくネバるのである。そして、見出された資料に即して、ご自身の意見を、謙虚に、淡々とのべられる

のだ。

「明治五年十月七日の『京都新聞』に布哇国領事米人イ・エム・ヴァン・リードが大坂から入落して横浜に帰る途次、三重県庄野駅で病氣となり、同人の申越によって京都府御雇の独逸人医師ヨッケルが出張してその病を医したことが報ぜられ、且これに対するヴァン・リードの片仮名書きの礼状が掲載してある」(「ユッケル・フォン・ランゲツゲ」)

この『京都新聞』は、明治四年五月創刊の『京都新聞』(旬刊)が、同年八月に改題されたものだ。重久先生はこうした刊行物のページを丹念にくって、京阪地区の御雇外国人に関する記事を拾われたのである。また、

「およそ三十年前に筆者は外務省記録を採訪した時、外国人雇入関係文書の中から明治十年代に京都府知事から外務郷に報告した『同志社視察之記』を見出した。(中略)最近筆者は『同志社視察之記』を再び見る機会があって詳しく読むと、この報告書は同志社社史の空隙の一部を埋める貴重な新史料であることを再認識したのであ

る」(「京都府からみた同志社」)

『同志社百年史』は、この資料に限らず、先生の恩恵を少なからずこうむっている。

重久先生が生涯をかけて渉猟された資料は、気のおくなるような量であろう。この著作集は、先生が蜜蜂のような根気で集められた資料から、したたりおちた香たかいエッセンスである。古びることも、朽ちることもないであろう。

巻末に「略年譜」「主要著作目録」「人名索引」が添えられているのも有難い。

河野仁昭 (本部社史資料室室長)

同志社大学人文科学研究所編

『「七一」雑報』の研究』

(同朋舎出版・発行一九八六年三月)
A5版・二八二頁 五、〇〇〇円

「七一雑報」(しちいちぢゅうほう)は日本におけるもっとも古い週刊紙のひとつである。創刊は一八七五年十一月、神戸である。

同紙はミッション(アメリカン・ボード)が資金を提供し発刊したもので、神戸にいた宣教師(O・H・ギュリック)が責任者であった。発行と編集にあたっては神戸の

教会員たちが中心となった。

なにしろ創刊がキリストン禁制の高札が撤去されてわずかに二年後のことなので、この「日本語による最初の宗教的、な新聞」(ギュリック)の名称に関しては、関係者の間でさまざまな論議がかわされた。ギュリックの回想(一八八五年三月七日付のN・G・クラークあて書簡)によれば、宗教的なタイトルをあらかじめつけければ日本政府を立腹させる懸念があるばかりか、講読者によけいな警戒心を与えたり、一般人たちを遠ざけかねない恐れがあった。

その結果、「七一雑報」という、キリスト教色を前面に出さない「あいまいなタイトル」に落ちついた、という。ギュリックが同紙を *Seven One Miscellany* とか *Weekly Miscellany* とか表現しているように「七一」とは「七日に一度」(週刊、ウィークリー)を意味する日本語として考え出された。

こうした経緯から想像できるように、記事はキリスト教界のものに限らず文明開化をめざす啓蒙的なものをも多数含み、実に多岐にわたる。「雑報」と名づけられたゆえんである。それだけに同紙の文獻上の価

値は高い。ギュリックの新潟転出にともない、創刊八年にして廃刊されたのは誠に惜しい。

このたび、この貴重な「七一雑報」に同じ同志社大学人文科学研究所が初の本格的な研究書を刊行した。三年間におよぶ研究会活動の成果であり、同研究所の杉井六郎教授をはじめとして十一名の研究者が十二篇の論文を寄せている。

その内容は記事の多彩さを反映している。が、「七一雑報」の性格上、紙面にあられた論説、神学思想、安息日学校、日本基督伝道会社、東京伝道、信州伝道、東京親睦会といったキリスト教史上の分析がおのずから中心となっている。

けれども、本書の特色はこの分野での地道な発掘作業と研究にととまらず、「七一雑報」をさらに幅広く日本近代史の中に位置づけようとする試みがいくつか意欲的になされていることにある。すなわち、週刊紙、教育観、社会教育、保健衛生・リクレーションといった面からの分析がそれである。

収録された十二篇の論文はいずれも開拓

的な意義が高く、学界に寄与するところが大きい。このうえば計画中の「七一雑報」本体の翻刻と「記事策引」の出版とが一日も早く実現することを願ってやまない。同紙が私たちに身近かな存在となれば、本書の価値はさらに一段と高まるはずである。

本井康博（敬和学園高等学校教諭）

大下尚一・西川正雄

服部春彦・望田幸男編

『西洋の歴史〔近現代編〕』

（ミネルヴァ書房・発行一九八七年二月）
A5版・三一八頁 二、〇〇〇円

今日ほど歴史教育、ことに西洋史の教育が難しくなっている時はない。西洋に対する評価の変化にともなって、西洋をみる視角が多様化しただけでなく、歴史研究の視野の拡大と研究分野の細分化によって、標準的な「西洋の歴史」とは何であるか、ほとんど一致点を見出すことはできないのであるまいか。本書は、そうした歴史教育上の困難を克服すべく編まれた、大学における一般教育向けの西洋近現代史の教科書である。

本書のまず目指すところは、「どのような

見地からの歴史論を説くにあたって、まず心得ておくべき」、「歴史上の基本的知識」の提供である。その見地から本書全体は、伝統的な西洋近代史の編別構成に従い「近代ヨーロッパの胎動」「絶対主義の時代」「ブルジョワ革命とその余波」「産業革命とナショナリズム」「帝国主義の時代」「ファシズムと第二次世界大戦」の六章に分けられ、各章の冒頭に四人の編者による簡潔な概観がおかれて、さらに、それぞれの章に関連する事項が専門家によって手際よく解説されている。編者の意図からして、ここには特別に目新しい試みはない。現在の研究成果を踏まえたむしろ着実な「歴史上の基本的知識」が提供されている。

類書にない斬新な試みは、「歴史学の新しい研究動向や問題点を提示し」、「学問としての歴史学の形姿」の一端に読者を触れさせようとする「歴史の探究」と称する各節に対応する部分である。たとえば、「宗教改革と資本主義」「絶対主義論争」「フロンティア学説」といったそれ自身が長い歴史をもつ論争・学説の紹介から、「エリート

論争」ラテンアメリカの従属問題」のよ
うな比較的新しい論点の解説にいたるま
で、きわめて多様である。それぞれのテー
マには参考文献が与えられていて、読者の
関心にしたがって「発展学習」へと開かれ
ている。

おそらく、このような多様な論点を提示
するだけでは、ことに初学者たる読者をか
えて混乱に陥れ、歴史研究の現代的・主
体的意味を見失わせることになりかねない
ことを恐れてであろう、「ヨーロッパ近現
代史のとらえ方」を最後に付して、論者な
りの歴史学の現状についての史学史的な解
説を与える。

基礎的歴史学習を学問研究へと橋渡しし
ようとするこのような試みにおいて、現在
の西洋近現代史研究の多様性をそのまま提
示する方法は、たしかに困難を克服する一
つのいき方であるが、それだけ読者に主体
性が要求されるということでもある。

今関恒夫（大学文学部教授）

駒木 敏編

『神話・神話・物語——伝承と

儀礼——』

桜楓社・発行一九八七年三月
（A5版・二三四頁 三、八〇〇円）

本書は「日本文学にとって伝承とは何
か」、さらに「伝承にとってテキストとは
何か」という「きわめて困難な課題」を正
面から取り上げ、二年余りにわたる共同討
議の場を経て編まれたものである。

その目次と執筆者は、次の通りである。

序章 神話伝承と儀礼	駒木 敏
I 章 歌掛きの様式	駒木 敏
II 章 童謡の原理	今井 昌子
III 章 旧辞の編集	宮地 正司
IV 章 系譜の語り継ぎ	広田 収
V 章 色好みの形成	小島 繁一
VI 章 貴種流離の構造	塩田 和子
VII 章 軍語りと証言	谷口 広之
VIII 章 朝敵と名告り	柳田洋一郎
IX 章 求婚難題の方法	卓 淑卿

さて、その「あとがき」によると、「絶
えざる動態的過程のうちに生成し構成され
る伝承的テキストのありようを、完結した

テキストそのものを対象として見透してゆ
くべき方法は、どこに求めることができる
のか」という問題意識から出発し、「神話」
「歌掛き」「童謡」「旧辞」「竹取物語」「伊
勢物語」「源氏物語」「平家物語」「将門記」
などを対象にして、伝承的テキストの構造
や様式にかかわり、「その元型性を神話的
伝承と規定」し、それぞれのテキストが
「どのような元型性を内側に仕組み、かつ
一回的な構成体として定位しているのか」
という視座を定めて各論を展開する。

序章では、従来の口承と書承という対比
的視点を批判して、「伝承史的方法」によ
るテキスト分析の方法の手続きを示す。つ
まり、「その方法は、テキストをひとつの
伝承構成体として、それを編集句と伝承断
片に分離する。編集句は、それぞれの生の
座における編集者による付加・改変の部分
である。それを除去したところに伝承断片
を認めることができる。伝承断片は様式に
もとづく定型によって伝承構成体に組みこ
まれている。」（広川勝美『ものがたり研究
序説 伝承史的方法論』桜楓社）という様
式的原理を取り出し、伝承構成体の有り様

が求められる。そしてテクストは、「内なる原理としての様式に基づいて、絶えず織りなされつつけることをもって存在する。」と規定する。

I章以下の各章では、序章で提起した方法論を具体的に敷衍させ、歌謡・神話・物語・説話などのジャンル、あるいは表出の形態を超えた「テクストの根源的仕組み」を解明しようとする。I章では、歌掛きの類型を抽出し、それがどのような様式のテクストであるのかについて考える。歌謡の始原的な問答形式から解き明かし、その形式的枠組みは、問答の鍵ことばが対称的に配置されるところに形成されると分析し、歌掛きテクストは、「儀礼の配置性と相間的な構造を呈示していた」と指摘する。II章では、日本書紀と靈異記のワザウタについて、その表現形式を手がかりにしてワザ性の様式を取り出し、「ことばのわざ性を原理として成り立っているテクスト」であると見えざる様式を強調する。III章では、古事記テクストの作品としての個性の評価を追究し、フルコトの性格、天地創成神話や天孫降臨神話などの分析を通じて、古

代天皇制の神学の確立を古事記に見ようとする。IV章では、源氏物語テクストのうちに光源氏伝承を仮構し、その「光る君」の名義から説き明かして、天皇の系譜における対偶された位格として位置づけ、光源氏の基層に「異人性」を認める。V章では、伊勢物語テクストを中心にして、「色好み」がどのような構造において活性的な枠組みたりうるのかを追究する。それは禁忌への背反であって、負の位相を担うことによつて活性的な仕掛け性が捉えられるという。

VI章では、源氏物語などの表層のテクストから基層のテクストに至る「貴種流離譚」の構造を明らかにするために、「まれびと」と「異人」の差異を軸にして論じる。VII章では、「軍語り」は表層から下降して基層において認められるテクストであると規定し、その波及する方法的展望を、熊谷直実の軍語りによつて開陳する。VIII章では、将門記の伝承テクストの基層に「名告り」の様式を認め、それはテクストの表層において、合戦の場における名告り、あるいは系図として織りなおされるという。IX章では、竹取物語と中国四川省の斑竹姑娘伝承

を取り上げ、「求婚難題」を軸にして伝承の型の相違、書承と口承テクストの違いなどを指摘し、竹取物語の位置を明らかにしようとする。

これまで粗略な紹介を進めてきたが、各論の視点は明確である。それは伝承的テクストの「基層から表層に至る重層的構造」を解明することで終始一貫している。

宮岡 薫（甲南大学文学部教授）

アントニオ・F・アグイール著

川島秀一・工藤和男・林 克樹訳

『フッサール現象学』

（法政大学出版局・発行一九八七年六月）
B6版・二三二頁 二、二〇〇円

現代の哲学は、どのような問題と格闘し、いかなる方向を目指しているのだろうか。本書は、こうした問いを抱く者に有益な示唆を与えてくれる本格的な研究書である。

周知のように、フッサールを始祖とする現象学的運動は、現代哲学の展開のなかでも極めて重要な位置をしめている。著者は、自己のフッサール理解を手掛かりにして、そうした運動の継承者のなかからヴァ

ルデンフェルス、リクール、ヘルトといった相手を選び、思索的対決を迫っている。その際に主に取り上げられるのは、他者、生世界、相互主観性、現象学と解釈学といった問題である。

他者および相互主観性の問いは、今日、現象学のみならず、社会学、心理学、精神分析学、国際関係学などの分野でも緊急の課題となっている。生世界の問題の重要性も、人間と管理化された情報社会、技術化された自然との関係が問い直される過程で、フッサールの「危機」意識をもって受けとめられている。他者の存在を問い、自己と他者の関係を考え、人間と自然的世界の係わりを再考する試みは、今後とも、思想的な主流となるであろう。

著者の思索は、現象学的立場からなされた、そうした試みの一つと見なせよう。現象学的立場に立脚する者は、古来言われている「物事があるがままに見つめよ」という忠告に従わなければならない。その時に、他者が、「汝」がどのように見えてくるのか。あるいは、われわれが現に生きているこの世界は、われわれに對していかに

現れるのか。目に見える世界が目に見えるものとのように交錯して現れているのか。その見え方、現れ方を、思い込みや偏見を排して、細かに記述するところに現象学の現象学たる所以がある。

本書を注意深く読めば、硬質な記述の背後に、他者や生世界が生き生きと現れてくる有様を把握できる筈であり、なぜ現象学において殊更に他者や生世界が問われるのかも明かになるであろう。そのことを通じて、現代の哲学や思想が逢着する課題により深い洞察を加えることも可能となるであろう。本書には、反省と生、科学と生世界の関係に関しても重要な思索が随所に展開されており、熟考を促される。われわれが世界の中で生きている意味に関心をもつ者には、欠かせない一書といえよう。

和田 渡（大学文学部囑託講師）
関口茂久・岡市広成編著
『行動科学としての心理学』

（ブレイン出版・発行一九八七年四月）
（A5版・二一〇頁 一、八〇〇円）

世間では心理学への関心は強いが、その割には心理学的研究に対するイメージはま

ちまちまである。本書は、心理学をこれから学ぼうとする者に一つの明確な方向を示し、何を与えようとしているかが明快である。

序文で、その意図が明らかにされている。『……人間の行動を理解するためには、まず生物としての特徴を理解することが重要である。……心理学を学ぶ者は、人間の行動を正しく理解する考えを学びとらねばならないのである。』編者がこれまで築いてこられた学問業績からみて、当然強調されるべき点であろう。

本書の最も顕著な特徴は、約四分の一程度が図表で占められていることである。過去にも何冊かこのような図解形式の図書が出版されてはいたが、これほど徹底したものは我国では少ない。このようなメディアの使用で、記述されている内容も今まで見られない新鮮なものへと変化している。残念ながら、写真であるはずのものが一部スケッチであったりしているが、これは経費上のことで仕方がなかったのだろう。また、紙面数の制限もあつたのだろうが、説明記述が不足している部分があり、テキス

トとして新しい方法を開拓された反面、本書だけを讀んで独学しようとする読者には少々理解の困難な部分がある。

本書の構成は、第一章では行動の成立を説き、続いて第二章では、環境に適応的な行動を生起させるのに必要な、情報処理の基礎となる感覚および知覚について述べている。第三章に入ると、新しい行動が獲得されていく過程について述べられるとともに、記憶のメカニズムが説かれている。行動のエネルギーに関する解説が第四章でなされ、動機づけと情動のダイナミックスが明らかにされる。第五章では、行動の個人差に関する問題を、知能と人格の側面から解説している。感覚や知覚を情報処理の基礎とするならば、思考は高次な処理過程であり、言語はその重要な媒体である。第六章では高次な適応行動の基礎を説いている。そして最後に、行動の生理学的基礎が述べられている。徹底した「行動科学としての心理学」であり、曖昧さが無い。

もう一言述べるなら、本書が意図した枠組の中で、「行動の発達」「社会における行動」について解説してはしかった。挑戦す

べき新しい分野に向って、どのように処理、解決されるかが今後の楽しみである。

山内弘継 (文学学部教授)

渡辺武男・星野貞一郎編著

『福祉社会学』

(ミネルヴァ書房、発行一九八六年十二月
A5版・三〇九頁 二、四〇〇円)

本書は、ますます複雑・多様化しているわが国の社会福祉現象とその実態を「社会学」の固有の分析枠組・方法にて明らかにしようとしたものである。執筆者達は社会学を学んでから社会福祉の実践現場を経験した、あるいは今しているという共通の経歴から社会福祉にも精通し、かつ社会学の社会学的研究に共通の関心を寄せている意欲的な新進の研究者である。

本書は、第一部「福祉社会学とは」、第二部「福祉社会学の実際」という二部構成になっている。第一部では、社会福祉の基礎科学となるべき、また「社会学の一般原理を社会現象としての社会福祉現象に應用する特殊社会ないしは連字符社会学として位置づけられる」社会福祉学の課題や研究系譜、研究領域とこれを分析するための枠

組、これを基礎づけるための社会学的概念とは何かについて述べている。第二部では、わが国の社会福祉現象とその実態を社会学的にアプローチし、研究素材の提供を試みている。社会学の固有の分析単位である個人・集団・組織―社会をタテ軸とし、「クライエント」「家族」「社会福祉組織とそこで働く人達」「社会福祉施設」「地域社会」「生活福祉環境」「福祉国家と福祉社会」などの実際の社会福祉場面や現象をヨコ軸に分析を試みている。

社会福祉学は深刻になりつつある高齢者社会諸問題に代表されるように、まさに学際的研究を必要としている。またこれまでの多くの研究は社会福祉学から他の領域の成果を応用した方法がとられていた。このために、たとえば概念的用語の不統一があったり、他領域への説得力ある実践面の理論的一般化に弱点があったといえよう。このような意味からも本書の内容は、社会福祉の現場実践が求めている有効な分析枠組・方法を提示していると思われる。福祉社会学はいまだその対象と方法の体系化がされていないというものの、社会福祉を

学ぶ人に新鮮な視点を与える好書である。

黒木 保博（大学文学部助教授）

金丸輝男著

『EC——欧州統合の現在』

（創元社・発行一九八七年四月
A5版・三二五頁 二、〇〇〇円）

欧州経済共同体（EEC）条約ができてから本年三月で三十年が経過した。EEC、欧州原子力共同体（EURATOM）、欧州石炭鉄鋼共同体（ECSG）のそれぞれが執行機関が統合されたのは一九六五年である。さらに、本年七月には野心的な欧州統合の目標を盛りこんだECの単一欧州議定書が発効した。「ヨーロッパ合衆国の実現」という理想が組織的に着々とすすめられてきている、といえよう。

ところで、ECに対する関心は、今日きわめて大きくなってきている。統合がどこまですすんだのか、世界のなかでECはどのような地位にあるのか、また、日本とECとの関係はどんな状況か、などの点についてである。

本書は、とくに、法学部のEC研究者を中心としてこれらの問題に答えようとする

成果である。

まず、入門篇では、ECの概観、統合の歴史、経済統合の基礎について概説している。

II章ECの制度では、機関、政策決定の構造、公務員制度、EC法、司法制度が解説されている。

III章ECの政策では予算、通貨統合、農業政策、漁業政策、エネルギー政策、地域政策、人の移動、社会政策、環境政策、教育政策、情報政策などがとりあげられている。

IV章のEC対外関係では、対途上国政策、外交政策の統合、日本EC貿易問題が対象となっている。

V章およびVI章では政治問題がとりあげられており、欧州議会、オンプズマン制度、理事会および欧州理事会の役割などが解説されている。

さいごに、統計からみたECの章は、各分野について統計からECの姿をうきばりにしている。図表を示してわかりやすく工夫した点も読者には便利である。

ともあれ、ECを歴史、政治、経済、法

律、制度のあらゆる面から素描している点できわめて総括的かつゆきわたった内容となっていて、ECの実体について基礎的に把握したい人びとにとって格好の書物といつてよいだろう。

ところで、欧州における統合の経過は本書で示される通りではあっても、統合がかならずしもスムーズに進んでいるわけではない。ルクセンブルグ危機、欧州通貨制度の停滞、EC財政の問題などいづれも統合の進展と停滞がうらはらとなっていることを示している。この面の分所も欠かせないのではないだろうか。とはいえ本書は、ECを総合的に紹介した労作として高く評価できる。

内田勝敏（大学商学部教授）

恒藤武二編

『ヨーロッパ思想史——社会的

思想を中心に——』

（法律文化社・発行一九八七年五月
A5版・二五五頁 二、二〇〇円）

思想史の、新しい魅力的な通史をかくことは、今日では非常にむずかしい。

この本の「序説」でも指摘されているよ

うに、現在では、研究の物的条件の改善と研究者の増加により、思想史研究のあり方がおおきく変化している。一方では、個別の思想ないし思想家の掘り下げた研究がすすめられ、他方では、それぞれの時代の社会的・文化的状況の綿密な実証的解明の努力があくことなくつづけられている。こうした研究の緻密化・専門化のもとでは、伝統的・形式的な平板な通史は陳腐化する。だが、現代の高度な個別研究の成果を全体の観点から取捨選択し、相互に関連づけ、一貫した通史とすることもまた至難のわざである。しかし、専門化による知識の断片化・奇形化をさけるには、正確な全体の概念図をもつことが、どうしても必要である。専門化がすすむほど、最新の研究成果をふまえた良質の通史の必要性も高まるといつてよいであろう。

この本のねらいのひとつもここにあらると思われる。したがって、この本は、概説書とうたわれてはいるが、たんなる入門書にはみられないいくつかの特色を打ちだそうとしている。第一に、古典古代以降のヨーロッパ思想史を各時代ごとにテーマを絞っ

て分析することにより、その流れ全体の大筋を示すと同時に、各時代の思想のもつ固有の価値をあきらかにすること。第二に、法思想、政治思想等にせまく限定せず、各時代の代表的思想をとりあげ、それらを積み重ねて「思想」史とすること。第三に、高度な理論ないし教義とばくせんとした生活感情ないし時代精神のうちのいずれか一方をとり他方を切り捨てるのではなく、「社会的思想」の観点から、各時代の思想をその社会状況のなかでできるだけ具体的に・総体的にとらえるよう工夫されていること。

これらの試みは、いずれも意欲的な、したがってそれだけに困難な課題である。へたをすると、各章のテーマを絞りすぎて前後関係がわからなくなったり、時代ごとに異分野の思想が脈絡なしに論じられたり、厳密な論理分析も緻密な実証もない中途半端な叙述におわつたりすることになりかねない。しかし、この本では、こうした危険が最大限さけられている。これは、通史として、また各分野の専門家十数名の分担執筆した論文集としても、よむことのできる

本である。読者には、とりあえず自分の興味をひききそうな章からよみすすめられることをお勧めしたい。

谷川昌幸（大学法学部嘱託講師）

山本浩三著

『法学概論』

（ミネルヴァ書房・発行一九八七年五月）
（A5版・二六八頁 二、三〇〇円）

ここに取り上げるのは最新刊の書物、山本浩三著「法学概論」（ミネルヴァ書房）である。法学概論あるいは法学入門と題する書物は非常に多いが、本書の著者自身が「はしがき」において、「自分の専門とする憲法学にある程度自信をもつことができるようになるまでは、とても法律全般の講義などおぼつかないと考えていたのである。五〇歳をすぎて法学の講義をすることができて幸福だと思っている。」と述べているように、法学概論の書物は「書き易いようでも書き難い」もの一つである。林檎や蜜柑やバナナについて書くのではなく果物について書くのと同じであるからである。同時に、研究職は、著者においてもその例外ではなく、憲法学という個別分野、

そしてその中の特殊課題から研究をはじめ、個別分野の体系化の中から自己の方法論・考え方を生みだし、それに基づいて徐々に一般的な分野としての法学全般にその視野を広げてゆく。「五〇歳をすぎて……」という著者の言葉には、長い研究歴の中で
の余裕と落ち着きが感じられる。

本書の内容は、著者の言葉をもってすれば、「法の基本原理をまず説明し、ついで憲法、刑法、民法という主要な法の基本原理を叙述している。」というように、概説する法ジャンルを限定し、読者対象が大学一・二年生であることを想定し、かつ、大方の大学がカリキュラム編成のうえで一・二年生に配分する科目内容を「できるかぎり平明に概念を説明することに心がけ」ている。

特に、本書を通読してあげられる長所は、この「平明に概念を説明する」ことと、近代法上の諸問題を「冗長な説明を避けて的確に指摘する」ことに努力が払われている点である。書物にとって重要なことは、読者に分らせることであるとともに、教科書としての書物は、①概念説明が的確かつ

平易であること、②通読する読者に内容的理解の深化のための糸口を与えること、③そのためには、特に初学者に対して「考え方」を押し付けず、消化不良を起こさせないこと、④講義において著者あるいは講義担当者の解説・私見開の等の余地を残しておくこと等が必要である。本書は、これらの条件を十分に満たし得た書物である。

本書の今後の改訂にまちたいことは、法の静態面を中心におかれた方向を、法の動態面からの方向と絡み合わせて平易に説明していただくことであろう。著者の今日までの実務経験の深さからは容易なことと思われる。

山中俊夫（法学部教授）

大谷 實著

『刑法各論の重要問題』

（立花書房・発行一九八七年四月）
（四六版・五三一頁 三、〇〇〇円）

本書は、刑法各論の重要問題を余すところなく平易な話し言葉で分かりやすく解説した刑法各論の参考書であり、同じく著者の手になる『刑法総論の重要問題』(山)、(平)と対をなすものである。また、これらの参

考書は、体系書と併せて読まれることを予定されているといえるが、その意味では、本書は、大谷教授の体系書である『刑法講義総論』、『刑法講義各論』を含めた、いわば刑法四部作の一部をなし、同教授の刑法研究の集大成の一翼を担う著書として位置づけることができよう。

刑法は、学説の対立が極めて激しい法律分野であるが、同時に、判例を中心とした実務における刑法解釈がかなりの程度において成熟している領域でもある。そして、およそ刑法を学ぶ者にとっては、判例の正確な理解こそが不可欠であり、刑法の理論的思考においても実務との関連を重視しなければならぬというのが、著者の刑法研究における顕著な手法の一つであるように思われる。本書においても、著者のこのような志向が十分に発揮され、読む者をしていわば現行の刑法とでもいふべきものを自ずから理解させてくれるのである。

もちろん、著者の筆は判例のあり方を鋭く批判することにも向けられる。フォート・コピーによる文書偽造を積極に解する判例を、罪刑法定主義の立場から批判されるの

は、その一例である。また、コンピュータ犯罪やクレジット・カードなどのカード犯罪、さらに脳死をめぐる問題など、現代的な社会現象に伴う新しい論点について、ときには立法論を含め、著者特有の明晰な解釈が示されている。これらの問題について、学会におけるオピニオン・リーダーとして活躍されている著者の面目躍如たるものがあるといえよう。

本書の論述は、全体として、刑法各論の体系に沿ったオーソドックスなものである。しかし、例えば、各論のなかでも最もむずかしいとされる財産犯について、その保護法益を法律的・経済的財産説から統一的に説明され、従来必ずしも意識して論じられてこなかった新たな問題提起もみられる。こうした点も、読者の財産犯罪理解を助ける一つの工夫として、本書の特徴の一つに加えてよいであろう。

本書は、現司法試験委員による参考書として、刑法を学ぶ学生や司法試験受験生などの必読の書となると思われる。しかしそれだけでなく、各論の諸問題についての掘下げた論述は、学会に投ぜられた一石とし

て、重要な意義を有することに疑いはない。

青木紀博（昭和五十七年大学院法学研究科博士過程後期中退・大谷大学嘱託講師）

佐々木佳代編著

『都市生活の経済学』

（ミネルヴァ書房・発行一九八六年四月）
（A5版・二一〇頁 一、九八〇〇円）

本書は、経済学のテキストとして編集されたものである。だが、多くの経済学のテキストとは異って、食品環境・住宅・廃棄物・交通問題・社会心理など「経済学の領域を越えて、現代経済の問題が把握されているところに最大の特徴」（まえがき）と新鮮味があり、本書の大きな魅力になっている。それは、特に都市経済論の専門家としての編者（編者は女子大学家政学部教授）が、「都市生活の豊かさ」を強く願いがら本書を編んだからであろう。つまり「経済および経済学の課題は、『生活の豊かさ』の追求であり、決して豊かな生活の後退をもたらずものであってはならない」（八頁）という編者が、都市における人々の生活を正面からみすえようとしたからであろう。

編者は「人間が内的にも外的にも、今日ほど強く精神的ストレスを受けざるを得ない時代は、今までなかったのではないだろうか。大人も青年も子供も、非常に息苦しさを感じ、短絡的発想と利己的、快楽的欲望充足の生活に身を置くことによって自己防衛しているのではないだろうか」（まえがき）と問う。こうした時代に直面して「今必要なことは、国民一人ひとりが主体的な生き方を追求することであろうし、それを阻止する弊害をとり除いていくことであろう」（二〇頁）という。本書は、こうした主体的に生きるための問いかけが、生活の場から、それぞれのテーマに応じて随所になされている。

本書は、「不透明な時代」「資本主義社会生成の歴史」「日本資本主義の生成と発展」「高度成長から低成長へ」「貿易摩擦のゆくえ」「経済生活の国際化と多国籍企業」「国際通貨のしくみと円高・円安」「株式会社と企業集団」「社会資本と公企業の役割」「租税と財政のしくみ」「金融機関と金融革命」「生産と消費生活様式」「現代食品環境論(1)」「現代食品環境論(2)」「ハウジングと

住宅政策」「生活と廃棄物」「クルマ」社会と交通権」「家庭と家計」「自由と個人主義」「豊かな社会の青年期」の二十章からなり、それぞれの専門家によって執筆されている(一三・一四章は西岡一工学部教授、一五章は三村浩史工学部教授が執筆されている)。明らかなように現代の多様な問題が幅広く取り上げられているが、決してバラバラな印象を受けないのは上述した問題設定が巧みだからであろう。

どの章から読んでよく、適切な用語解説と図が配置され、参考文献も示されており、テキストとしての配慮もゆき届いている。

岡本博公(大学商学部教授)

辻 忠夫著

『国家と世界経済——政治的過程と経済的過程との統合的把握のために——』

(御茶の水書房・発行一九八七年四月
A5版・二八二頁 二、八〇〇円)

最近、経済の国際化が大いに進み、それに伴って教育や文化などの分野でも「国際化」の必要性が叫ばれている。

これに対して、資本主義は近年になって急に国際化したのではなく、生まれながらにして国際的・世界的なものであったといえは異論が唱えられるであろう。しかし、封建制から資本主義への移行に決定的な影響を与えたのが遠隔地貿易であったことは否定できない事実である。この点はかつてのドップとスウィージーとの移行論争においてスウィージーが強く主張したことであるが、我国ではあまり受け容れられなかった。

しかし、この見解はその後フランク、アミン、ウォーラスティンなどによって受け継がれ、七〇年代には「新従属論」という大きな理論的潮流となったことは周知のことである。だが彼らの理論は資本主義は生まれながらにして世界的なものであることを強調する余りにそれを構成する国民国家の意義を完全に無視してしまった。そのために、個々の国民国家内部の諸矛盾をみることができず、現代世界の矛盾を先進諸国と第三世界諸国の対立だけに矮小化するという大きな理論的誤りを犯したのである。

この誤りを克服し、資本主義の発展過程

における国民国家成立の必然性とその意義を明確にして新たな理論的地平を切り開こうと試みられたのがこの辻教授の新著である。すなわち、ブルジョアジーは、世界を国民国家として分断した上で新ためて自己の利益を共同利益として幻想させ、それによって自らの支配領域内の敵対する諸階級の懸橋とすることを試みたというのである。この典型例としてボナパルティズムが取り上げられ説得力のある議論が展開されている。

そして、国家を経済過程を含めた社会の総体のなかで捉えようとした視点が一貫して著書全体を貫いており、そのことがこの著書のスケールを一層大きなものになっている。こうした視点は経済学がポリテクニカル・エコノミーであったことからすれば当然のことである。しかし、現実には、近代経済学はいうまでもなく、古典派経済学を正統に受け継いだはずのマルクス経済学においても国家を上部構造として捉え、政治的過程と経済的過程とを統合的に把握することを放棄してきた。その意味において、この著書は経済学とは本来どういうも

のであるかを我々が再度考えてみる上で必
読の書であるといえよう。

中嶋慎治（アジア・アフリカ研究所員）

小林良彰著

『近代日本経済の発展』

（千倉書房・発行一九八七年二月）
（A5版・二二三頁 二、八〇〇円）

ユニークな日本経済の近・現代史

本書は、著者・小林良彰氏によれば「大
学で日本経済史を講義するための教科書と
して作られたものである」が、それにして
は随分とユニークな教科書である。

それは第一に、対象としている時代が江
戸時代から現代（小林氏はこれに「ハイテ
ク時代」というタイトルをつけている）ま
でと、日本経済史に関するテキストの常識
を破って、主として明治以降に局限して
いることである。

しかも、明治維新から日本資本主義の成
立に至るまでの過程の叙述に、かなり多く
のスペースを割いている。これは、小林氏
の主要な研究テーマが、主として「明治維
新とフランス革命」に置かれてきたことを
思えば、当然といえる。

さらに、現代IIハイテク時代を対象とし
て取り入れたのは、同氏によると「重化学
工業の成功までを論じていたのでは時代遅
れになってしまふ。私も時代に遅れないた
め」本書を書いたと言うが、まだ「歴史」
としての評価が定まったとはいえない「現
代」を、敢て「歴史」として分析しようと
するところに、小林氏の歴史家としての並
々ならぬ自負と意欲を感じるのである。

第二に、本書のユニークな面は、一応、
時代ごとに八章に区分してはいるものの、
全篇を通して小項目主義に徹していること
であろう。一項目をせいぜい一〜二ページ
で解説し切っているが、限られたスペース
の中で、必要な「歴史的事実」と「小林史
観による評価」とを盛り込んでいる手腕
は、それが小林氏の著作の特徴のひとつを
成しているとはいえ、見事というほかな
い。その点で本書は、日本経済史小辞典と
しても利用できる性格のものである。

さらに、本書をユニークなものにしてい
る第三点は、著者自らが言うように「将来
の英訳、海外への紹介、外国人の読めるも
の」を意図しているという点である。考察

対象を近・現代に限定したのも、現在の日
本経済発展の原点を外国人にも理解させよ
うとしたからであろうし、日本語の文章
をなるべく簡潔な文体で表現しようとした
のも、将来の英訳への準備と解釈できる。

以上、本書が日本経済史のテキストとし
ての常識を破ったユニークさを、私なりの
理解で整理してみた。しかし、もちろん、
本書の特徴が、「教科書としてのユニーク
さ」のみにあるわけではない。随所に、小
林氏独自の史観に基づく解釈や提言がみら
れる。

その意味では、本書は教科書の体裁をと
りながらも、経済史家・小林氏の主張の書
となっている。一読をすすめたい。

杉江雅彦（大学商学部教授）

太田進一著

『中小企業の比較研究』

（中央経済社・発行一九八七年五月）
（A5版・二一九頁 二、八〇〇円）

著者・太田進一助教授は、中小企業研究
分野で勢力的に活躍されている若手研究者
の一人である。この度、これまでの研究成
果をはじめて集大成され、本書として刊行

された。まず、これまでのご研鑽と今回のご努力に対して改めて敬意を表したい。

わが国の中小企業研究は、欧米先進国に比べて、たとえば下請制の分析に典型的にみられるように、実証的にも理論的にも水準がきわめて高い。なかでも、その相対概念である大企業、とくに独占的大企業との関連で「異質多元」な存在といわれる中小企業の共通性を総合的に捉えるという点多大の成果を挙げてきたことは国際的に誇りうるものである。

また、近年、技術革新・国際化・産業再編成などその経済・社会環境が激変し、中小企業が混迷を深めながらも新たな展開を遂げつつあることを受けて、中小企業研究はますます盛んになりつつある。だが、それは、いわゆる個別中小企業論が中心であって、産業的・地域的・国際的に多様な存在態様にあり、かつ最近変貌の著しい中小企業の動態を統一的に把握することに必ずしも成功しているとはいえない難い状況にある。

そうしたなかにあつて、本書によって「一部の産業や地域、特定の国だけを対象

とした……中小企業研究の欠点を克服（24ページ）するために、中小企業の産業比較・地域比較・国際比較という三本の柱をたて「中小企業の総合的比較研究の提起」という新たな展開を試み……いわば比較中小企業論の提起を行（はしがき）われたことは意義深い。すなわち、第一部「中小企業論の研究視角」と第二部「中小企業の比較分析」の二部構成からなる本書は、一國一産業（主にわが国の主要産業分野の）分析から中小企業の法則性を導き出すという従来の手法に飽き足らず、前述のような多元的「比較研究」という壮大な方法によって中小企業の総合的解明を試みられたところに特徴がある。その意味で、本書は中小企業研究分野に大きな波紋を生じるものとして評価されるに違いない。

しかし、それだけに逆に、他の中小企業研究者からは様々な批評・批判が寄せられるであろう。むしろ、著者はそのことを期待されて本書を刊行された節もある。そこで、私見を述べさせていたくならば、惜しむらくは紙数の制約もあろうが、たとえば第2部において分析視角の一貫性が弱い

など、論究の展開にいま一つ物足りなさが感じられるのである。

今後、著者は、最初の一里塚ともいえる本書を足掛りに、どのように中小企業研究を体系的に発展させられるのか、大いに期待される。

柿野敏吾（京都産業大学経済学部教授）
吉武孝祐著

『仏教による経営革新——ビジネスに人間性を求めて』

（ソリテック社・発行一九八七年二月）
B6版・一七五頁 一、〇〇〇〇円）

本書は、「仏教に心を洗う数少ない『経営思想』の書である」（まえがき）。

吉武先生は、一貫して「経営学は人間学である」（一三二頁）と主張されてこられた。つまり、「一枚のバランスシートにも、そこで働く人たちの喜びや、悲しみが表現されているはずであり、その計数的分析を通して『生きるとは何か』を問いつつ、自己と闘うことこそ、経営学を学ぶ基本的姿勢であると考え」（一三八頁）られてこられた。つとに有名な、斬れば血の出るバランスシート」こそ、この基本姿勢を巧みに

言い尽くされたものである。本書は、こうした先生が、東洋思想、とくに仏教によって、「科学的思考の発想を純化し、それを内面からしなやかに」（まえがき）しながら、「人間の『生』の原点」人間認識に根ざす経営思想（まえがき）を問われたものである。

本書の奥深い内容をこれだけの紙数では紹介することができないのが残念である。「序章 釈迦は、極楽大学」の学長であるから始まり「第八章 情報化」とは、情交々である——『随喜の心』に至るまで、本書は独特の語り口で読者を魅了する。たとえば、以下の短い引用から本書の味わい的一端でも知っていただきたいと思う。

「大学はたんに専門知識伝授の場ではなく、学問教育の場である。学問の間には、門の中に『口』があるが、専門にはない。『口』とは人間の意志・思想を表現する。大学がたんなる資格調達機関なら科目の単位取得で足りるだろうから『口』のない『門』でよい。そうなら門から入って門から出る——門くぐり——もぐり——ではないか。これに対し学問

とは、文字通り『問い』を学ぶことだ。知識を通して憧憬（あこがれ）・祈り・懐疑（何故か）にひたることである」（一六九頁）。

平素私たちが何気なく口にする多くのこと（たとえば「自在」とか「異和」とか）が、先生の手によって含蓄のある言葉として説得力をもってよみがえる。あるいは、「時間を抱いたか」（七八頁）と問われ、「思い」をみがけ」（一三四頁）と迫られながら、読者は人間を、人生を思うだろう。本書を読みすすみながら、読者は「経営と人間・人生を結ぶ思想の、ひろば」を翔ぶ」（まえがき）思いに浸ることもできるだろう。あたかも座談の名手、先生と酒でも酌みかわしているかのように。

本書はたしかに先生が言われるように「学術書としての体裁をもつものではない」（まえがき）。が、それだけにかえて多くのことが語られているように思う。ビジネスマンや若い人たちに限らず、多くの人に一読をすすめたい。

岡本博公（大学商学部教授）

S・V・M・クリューブ、W・M・ナビエ共著
藪下 信・木下 暁訳

『宇宙からの衝撃（上）・（下）』

（地人書館・発行一九八六年三月
四六版・（上）二六六頁、二、〇〇〇円
（下）二六六頁、二、〇〇〇円）

天文学の第一線で活躍している二人の英国の学者の共著 *The Cosmic Serpent: A Catastrophic View of Earth History* (1982) の邦訳である。訳者の藪下信さんは京都大学助教授で理論天体物理学者。同志社大学英文学科で長らく教えられた故貞方敏郎教授の女婿にあたり、本書の中にもその業績があげられている。共訳者の木下暁さんは同志社中学の英語科教諭で本書の中の神話、聖書、考古学関係の章を訳された。本書は彗星（原表題の「宇宙の蛇」は彗星をあらわす）の起源と実態を銀河系宇宙の文脈の中で記述し、しかも地球と衝突する可能性のある小惑星が千個近くも存在することを指摘し、さらに地球は有史前に、また過去五千年の間にさえ、何度か大型の物体と衝突してきたことを数々の証拠をあげて示すのである。古代の神話、聖書の記述の中

に、そうした衝突を暗示するものが多い。

本書は「神空にしろしめす。すべて世は事もなし」といった十八、十九世紀的世界観とは真向から対立する宇宙観を呈示する。統計の示すところでは、地球は今後も彗星やその断片等と衝突し続けていく。げんに一九〇八年六月三〇日にシベリアのツングースカ川の近くに落ちた飛翔体のように、水爆何箇分かに相当する被害をもたらした場合もあったのだ。それは太陽よりも明かるく、目をくまますほどの火球として落下し、その激突音は千キロはなれた地点でもきこえ、火柱は四百キロの遠くからも見られ、爆風は中心から七十キロにわたって森林をなぎ倒した。その衝撃エネルギーは四十ないし百メガトンと推定されている。

白亜紀の終り、約一億年前に恐竜が絶滅したことについて古生物学は何通りかの説明を与えてくれるが、本書はツングースカ異変を何百倍か上まわる飛翔物体の落下がその原因であったことを示唆する。大衝突は大洪水や地震、地磁気の変動や海面の上昇・低下等をもたらす。地球上の生物は或

る日、青天の霹靂をもって終末を迎えるのである。

著者たちは予言者でなく、あくまでも冷静な科学者である。著者たちは聖書のメッセージに興味はないようだが、この天文学者が抱く宇宙観は、ユダヤ・キリスト教的終末観と究極的には一致するということは、きわめて興味深いことだといふべきであらう。

北垣宗治（大学文学部教授）

玉村和彦著

『聖山巡礼』

（山と溪谷社・発行一九八七年五月）
（B6版・二五三頁 一八〇〇円）

誰も未知なる世界へ旅立とうとする。誰も未知なるものを探究したいと願う。

アルピニストでもある著者が、西チベットの広大な空間に広がり、時間を感じさせない巡礼ロードの慣習と婚姻の慣行を、揺ぎないデータの迫力でもってわれわれに迫り教えて呉れる。

わたくしはとくに、本書を気力と体力に溢れ想像力豊かな学生諸君に一読を勧め

る。著者もまた、控え目にそのことを願っているようである。次の一文を掲げよう。

「数千キロを何か月も歩いてカン・リンポチェにやってきたあの巡礼者たちが、私に書かせたといった方が正しい。

私はこの中で、巡礼者の群像を客観的に少しでも描き得ることに万一成功したとしても、彼らの死後天界（天国）に行きたいというあのひたむきな心を、描き得なかったのではないかと恐れている。また通い婚についても、現象面を追うのに精一杯であったのではないだろうか、と。

（中略）しかし補うには、隔絶の地にあったガリーはあまりに遠すぎる。

（中略）それは西チベットという遠い彼方の問題としてではなく、自分たちの問題として考える読者が多くいると確信していたからである。」（二五二―三五頁）

二

本書の庄巻は何といっても巡礼である。十数葉の聖地カン・リンポチェ、聖湖マナムユム・ツォ、それに巡礼者の旅姿の写真は美しい。巻頭に飾られて読者をいっつきに

引き込んでしまふ。一部七章が巡礼の旅人を描いている。

著者は日中友好ナムナニ（納木那尼）峰合同登山隊の一員として西チベットに行った。一九八五年四月、五月、六月のようである。わたくしはアルピニストでないし、またチベットの社会と文化を専攻する人類学者でもない。一人の社会学者にとどまる。そのため本書の真価を十分に捉えきれていないのではないかと危惧する。お許しをいただきたいと思う。

本書のページをめくると、聖山聖湖巡礼の旅は壮大である。三、〇〇〇キロの道を四カ月間歩いた者もいる。否、片道半年以上を要する巡礼者に多数出会っている。九カ月前、八カ月前出立とも記される。彼らは多く牧民である。峠の雪解けを待って、東から西へひたすら歩き続ける。途中は喜捨に頼りながら、老若男女、飢え、渇き、寒さ、寂しさに耐えながら、標高四千メートルを越す巡礼ロードを歩き続ける。杖と背負子、またはテントとポールを携えて、ただただ「来世の幸福」を求めて、「親族の供養」のために、「一生一度」の願いと

して巡礼に出る。そして「聖山カン・リンポチェの周りを何回か廻る」。一周五二キロ、右廻り一日の行程である。過去九百年間今も変わりなく生き続けている。

わたくしは改めて四国八十八カ所巡礼の老若男女を思い出した。少年の頃目にした春先きの巡礼姿である。もう一度考えてみたいと思う。彼らを動かす何物かを見極めたい。

三

本書の後半（二部）は「通い婚の村」である。四つの章に分かれる。農家では女子に夫が妻問いする。生まれた子どもが母親の家で育てられる。夫は同じ村にいる場合もあれば、片道歩いて二、三時間の隣村にいる場合もある。そして一家の複数の女性に複数の夫が妻問いして、複雑な家族構成をなすことがある。農民の一定戸数維持のための慣習であったという。わが国の事例とも関連させて、もっとチベット農民の妻問い慣行や、夫の役割、家族関係や家族の権威構造について、また、村落生活との関連について、詳しく知りたいと思う。

としても、著者の生気と迫力が全篇に漲

って、体験した者のみの文章表現がもつ強みを内包している。この歴史と空間の壮大な巡礼ロードは、著者の努力によってわれわれの眼前のものになったことに対して感謝し、その成果に賞讃のことは贈りたい。そして、この研究が日中共同研究を促し、また、多くの学問領域の協力を通して、さらに一層充実した成果が生み出される礎になることを願って止まない。わたくしは、それに耐え得るテーマであると思う。

松本通晴（文学文学部教授）